

設立25周年記念会特集号

巻頭言

法人設立25周年記念会を終えて 30周年に向かう

代表理事 新津ふみ子

当法人は25周年を迎え、7月5日(土)に東京・渋谷ソラス
タコンファレンスで「設立25周年記念会」を開催しました。

振り返ると、任意団体としての1年間の活動を経て、2001
年2月に「特定非営利活動法人」としての登録を完了し、これ
まで活動を続けてきました。

法人設立の趣旨は「福祉現場の応援団」「利用者主体の
サービス提供」「実践的な後押し」です。主たる事業を「福祉
サービスの第三者評価」とし、25年を経た現在は、第三者評
価機関として1都9県の推進組織から、そして社会的養護関
係施設の評価に関しては全国社会福祉協議会と東京都から
認証を得ています。



また、2005年には、第三者評価に取り組む全国の評価機
関・評価調査者とのネットワークや学習の機会づくりなどに取
り組む「第三者評価機関全国連絡協議会」を立ち上げまし
た。その後、この取り組みは2012年に「一般社団法人 全国
福祉サービス第三者評価調査者連絡会」(略称:第三連)と
しての登録に発展し、全国の評価調査者と学び合いながら、
それぞれの力量の向上に取り組んでいます。

この法人は、福祉サービスに関連する厚生労働省などの
省庁から受託して調査研究を行ったり、全国社会福祉協議
会や各県が取り組む第三者評価に関する各種研修の講師
依頼を受け、また対面やオンラインで参加できる独自の「評
価調査者研修会」も実施するなどして活動の幅を広げていま
す。なお、第三連の法人事務局は当法人の事務所に置き、
今日に至っています。

■これまでの記念会を振り返る

さて、これまでの記念会を振り返ってみます。

●設立10周年記念セミナー：2009年9月5日

テーマは「利用者の権利」です。

記念講演は「福祉サービス利用者の権利に関する現代的
課題—歴史的変遷を踏まえて」(若穂井 透／日本社会事
業大学 教授・弁護士)で、活動報告「宮崎県高原町におけ
る介護保険適正化事業に対する取り組み」(中村みどり／同

町・保健師)ののち、シンポジウムは「第三者評価から見える
福祉サービス事業者が取り組んでいる利用者本位の活動と
は」として評価機関3か所から報告してもらいました。

●設立15周年記念会：2015年7月19日

テーマは「第三者評価を意識しつつ、我が国のこれからを
考える」です。

記念講演は「2040年を見越した日本の社会保障を考
える」(藤井賢一郎／上智大学准教授)で、シンポジウムでは
15周年記念会のテーマのもと当法人の第三者評価を受審
している5か所の社会福祉法人・施設の理事長・施設長から
報告してもらいました。

●設立20周年記念会：2019年7月6日

テーマは「福祉サービス第三者評価を活用し、明日へ向
かう—苦情の価値、対応の適切性を考える:人として、そして
評価調査者として」です。

シンポジウム「苦情対応の現状と課題—第三者評価の視
点から」では「苦情対応の現状」として都道府県運営適正化
委員会事業(苦情受付・解決状況)の実績報告を行ってら
うとともに、第三者評価受審事業所4か所と評価機関2か所
から報告してもらいました。

上記の記念会の取り組みは、この会報の第22号、第42
号、第56号などに掲載しています。

■25周年記念会の取り組み

今回の25周年記念会の「テーマ」の選択に関しては、迷
いました。今後の課題は、制度的には明確になっているよう
に思えたことがその理由です。

考えた結果「自分たちの取り組み、評価機関・評価調査
者の取り組みを振り返ること、取り組みを公開して関係者の
意見を聞くこと、学びの機会とすること」としました。25年
以上も第三者評価に取り組んでいるので「惰性になってはい
ない



- 1～2P: 巻頭言◆法人設立25周年記念会を終えて30周年に向かう (代表理事: 新津ふみ子)
- 2～3P: 記念講演【要旨】◆地域共生社会を「生きる」 (古都賢一 (全国社会福祉協議会 副会長))
- 3～5P: 記念シンポジウム【報告】◆福祉サービス第三者評価の活用—評価調査者としての
経験と学びから
- 5～6P: 会場参加者から◆25周年記念会に参加して／事務局だより



表 記念シンポジウムの内容

■テーマ：福祉サービス第三者評価の活用—評価調査者としての経験と学びから

■登壇者からの報告内容

1. 現場経験などの実績の紹介および現在の仕事、役割など
2. 第三者評価調査者になることを選択した動機、理由など
3. 第三者評価調査者としての工夫、学習、準備など
4. 第三者評価からの学び、活用など（“自分ごと”として、現状の仕事への活用として、など）
5. 評価調査者としてのさらなる向上のために取り組みたいこと
6. 評価機関への問題提起など

■司会・進行：新津 ふみ子

■シンポジスト

評価調査者：岩野 一子〔保育士〕

評価調査者：佐久間 尚実〔介護福祉士〕

評価調査者：村上 信〔社会福祉士〕

か」と自分に言い聞かせながらのことです。

第三者評価は、評価調査者の役割が大きく、その一人ひとりの実力が大きく影響を及ぼします。したがって評価調査者個々の経験は欠かせませんが、その個人差も顕著です。自己の経験を活かすためには、他者の経験を聞き、視野を拡大し、適切性を強化する必要があると思います。

当法人は、チームによる評価を大切に、評価のプロセスでは意見交換する機会をできる限り取り入れるようにしています。そして、これまでの評価の経験を生かした標準化、マニュアルの作成、文書化による“見える化”などが必要になると思い、それらに取り組みながら今日に至っています。

でも「本当にできているのか」「不足しているものは何か」と思い、この25周年の機会に当法人所属の評価調査者から率直な意見を聞き、今後の取り組みに生かしたいと考えました。

今回の記念シンポジウムの趣旨や内容は、表に示すとおりです。

シンポジウムのテーマは『福祉サービス第三者評価の活用—評価調査者としての経験と学びから』で、当日はシンポジストとして3名の評価調査者が卒直な意見を語りました。

聞きながら、私はいつの間にか涙ぐんでいました。反省しながら挑戦している一人ひとりの想いに感動し、唯々、報告に聞き入っていました。私からの意見は何とも思い当たりません。会場の参加者から、意見をいただきました。懇親会でも意見交換がしやすかったのではないかと思います、また「開かれたかなー」と勝手に思いました。

なお、今回の会報の発行にあたって、シンポジスト3名からも改めて感想や意見をもらい、掲載しています。



記念講演は“これから”をしっかりと考えることを課題として『地域共生社会を「生きる」』というテーマで話していただきました。講師は、古都賢一さん(社会福祉法人 全国社会福祉協議会 副会長)です。制度の話にとどまらず、生きる意味、地域住民としての役割についても触れた具体的な内容で感銘を受けました。

古都さんの言うように、生きる意味を考えて「あとから来る者のために」を意識し、これからもメイアイヘルプユウの活動を続けていきたいと思いました。

30周年は、遠くありません。仲間たちと一緒に明日に向かいます。

記念講演【要旨】

地域共生社会を「生きる」

ふるいち けんいち

古都 賢一(全国社会福祉協議会 副会長)

わが国は2007年をピークに人口減少が続き、昨年2024年の出生数は将来推計より15年も早く70万人を下回り、同年の死亡数は160万人を超える典型的な少子多死社会です。

人口減少社会では、市場の縮小、労働力不足、財政難、地域差の拡大などの課題がより顕在化し、社会全体が縮小します。複雑多様な生活困難を抱える人たちが増加するなかで、その支え手の不足、支援の財源問題、供給の地域差などにより、福祉サービスの維持自体が危うくなっています。

国は「地域包括ケアシステムの構築」「地域共生社会の実現」などの社会目標を掲げていますが、どのような施策をとったとしても、長期にわたって人口が減少するなかで、地域社会に多くの困難が増すことを避ける取り組みは容易ではありません。

希望と言えば、先進国中、健康寿命が最も長いことでしょうか。老いても、我々自身が覚悟して、地域社会を支えていかねばならない時代になりました。



これまでも、日本社会は幾度となく社会的な困難を乗り越えてきました。社会福祉事業の黎明期、117年前の1908年には、全国の慈善救済事業の関係者が一堂に会し、協力して事業内容を向上させようと「中央慈善協会」(会長：渋沢栄一)が設立されました。

その後、渋沢は1921年の「社会事業協会」への『改称改題の辞』で、社会的貧困には社会連帯で当たる旨を述べており、貧困を、社会が生み出す構造問題として捉えています。そして、支える者も支えられる者も“平等・対等の主義で取り組むべし”と語る彼の言葉は、今でも輝きを放ち、深い感銘を受けます。



それ以降、今日まで多様な福祉実践が営まれ、これを追いかけるが如くたくさんの方々の制度もできましたが、制度はあくまでも問題解決の手段に過ぎません。

戦後の福祉制度の転換点の一つである2000年の「社会



記念シンポジウム【報告】
福祉サービス第三者評価の活用
—評価調査者としての経験と学びから

にいっ ふみこ
司会・進行：新津 ふみ子
いわの かずこ さくま なおみ むらかみ まこと
シンポジスト：岩野 一子／佐久間 尚実／村上 信

■シンポジスト・1／岩野 一子

幼稚園勤務の後、大型児童館に保育者として17年、その後、保育所に7年勤務して定年退職しました。現在は「児童センター」で、現場経験を活かしながら乳幼児や保護者のやりたいことが実現できるよう、気持ちに寄り添いながらサポートしています。

第三者評価は、保育所時代に施設長として受審していました。初めての受審時、「組織マネジメント」の項目では何を問われているのか、その問われていることに自分たちの実践の何が当てはまるのかわからず、受審経験のあった系列保育所の園長に教えてもらいながら記入したことを思い出します。

評価調査者となることを選択したきっかけは、保育所を定年退職する年に受審した評価機関からのお誘いです。しかし、大型児童館に勤めていた時代の上司（メイアイヘルプユー会員の評価調査者）からも誘いを受けていたことを思い出し、先に連絡したところ、そのままメイアイヘルプユーから都の「養成講習」を受けることとなったのです。

私の場合、評価にあたっての準備として、まずは第三者評価で訪問することが決まった事業所のホームページから情報を得て、次に“福ナビ”（とうきょう福祉ナビゲーション）で過去の評価結果を確認し、事業所から送られた資料等に目を通していきます。メイアイヘルプユーでは資料の事前読み込みの会議もあるので、そこで評価チームのメンバーと事業所への理解を深めながら、訪問調査時に確認したい点を洗い出すなど、OJTのなかで学ばせていただいています。

私にとって、第三者評価に向き合う姿勢、評価調査者としてのあり方の学びの場がメイアイヘルプユーであると感じています。まだ、どこまでもOJTが続きます。

このたびの記念シンポジウムに参加して、遅まきながら、メイアイヘルプユーが第三者評価制度の確立以前から活動を続けてきた歴史を改めて知りました。その長い歩みのなかで、新津代表をはじめとする先輩評価調査者の皆様が積み重ねてきた数々の「学び」が、現在の法人の第三者評価調査者としての「姿勢」や「あり方」を形づくっていることを実感しました。

シンポジウムの冒頭、新津代表が語った「評価調査者になるにはまず経験が



福祉基礎構造改革」では、福祉の理念を「身近な地域でその人らしい自立した生活の営めるよう支援すること」とし、契約制度への転換、利用者支援制度の構築（サービスの第三者評価制度、苦情解決制度など）、地域福祉推進の環境整備などが行われました。四半世紀を経た今日も、この基礎構造改革の延長線上で諸福祉制度改革が続いていると言ってよいでしょう。

特に、多様な生活困難を抱える人たちのために、縦割りを超えて包括的な生活支援の提供が実現できるよう、サービスの充実だけでなく、多様な主体の連携協働が強く模索されるようになっていきます。このため、2015年からの「生活困窮者自立支援制度」などの一連の改革では、地域福祉実践と制度の接近がより進んでいるのです。

◇
このように、社会経済も制度も変化の著しい現在、私たちが「地域共生社会」で「生きる」とは、どのようなことでしょうか。

私は「ヒト」の本質は「支え合い」にあると思っています。その意味で、地域共生社会の実現とは、現代文明を支えた専門分化という陥穽（かんせい）を乗り越え、誰もが多様な役割を演じながら、支え合って心の豊かさを享受できる地域社会を一緒に創ることではないでしょうか。

現代社会が多くの人の分業で成り立ち、その恩恵を享受しているにもかかわらず、誰もがその効用に気づかず、最近の「タイパ」「コスパ」という流行言葉が表わすように社会全体が効率重視の世界となり、日々数字に追われている感があります。豊かなモノやサービスが得られることで、人はまるで一人で生きているかのような錯覚に陥っているとも言えましょう。

そのなかにあって、自分を見失ったり、他者との関係性を喪失して、孤独、孤立、生活困難に陥っている人が生まれています。誰もが、何のために、誰のために、どのように生きたいのか、改めて考えるときが来ています。

◇
私たちが「地域」で「生きる」ことには、情報論、環境論、人間関係論から見て、合理性があると思います。1990年代以降の社会福祉制度改革でも「住み慣れた地域社会」とよく言われました。それでは、これをどう理解するのでしょうか。

「地域」は、誰もが人としての教育を受け、生計を成り立たせ、社会関係を営み、多くの人生経験を積んできた場だと思います。単なる数字で表わせない、多様な要素が混交した場であると言えましょう。モノや情報があふれ、効率重視の社会にあってこそ、いま一度立ち止まり、誰もが「生きる」ことにもう一度向き合い、他者に左右されるのではなく、それぞれが自尊感情、自己肯定感を大切に、生きる意味を内発的に見出しながら、誰ともつながっていける地域社会を再構築することが必要ではないでしょうか。

◇
どのような時代にも、世の中の流れに棹さず人々がいます。彼らの言葉や実践から、さまざまなことを、ゆっくりと、ごちゃ混ぜにしながら、新しい価値観を創造することが見て取れます。

彼らの言葉にわずかでも光を見出しながら、私たちは後から来る者のために、いま自分にできることを精一杯に行うことが、心地よい地域共生社会での私たちの生き方となるのではないのでしょうか。

必要」「研修が重要」そして「評価実績からどのような学びを得ているか」という言葉は、私自身の現在の課題とも重なり、深く響くものでした。

これまでの経験を活かしつつ、今後も内部・外部の研修に参加して学びを深め、評価調査者としての質をさらに高めていきたいと考えています。自身の課題にどう向き合い、どのように学びを重ねていくのか、今回のシンポジウムで気づいたことを糧に、自問自答を続けながら今後も日々努力する所存です。

メイアイヘルプユーの一員として活動できることに心から感謝すると同時に、その一員であることの誇りと責任の重さを改めて感じます。また、この場を借りて、この道への一步を踏み出すきっかけをくれた元上司に深く御礼申し上げたいと思います。

■シンポジスト・2 / 佐久間 尚実

私は、介護保険制度が始まるのとほぼ同時期に、海外旅行のツアーコンダクターから現在の職場である社会福祉法人に介護職として転職しました。法人は、特養などの高齢者介護の施設等を運営し、現在の私は特養の副施設長と居宅介護支援事業所の管理者を兼務しています。

2018年から評価調査者となりました。その年、米子市で開催された「社会福祉法人こうほうえん」等が主催する“オールジャパンケアコンテスト”で、アドバイザーとしてご一緒した新津代表や鳥海事務局長から第三者評価のことを教えてもらったことがきっかけです。



第三者評価の初心者の方にとって、受審事業所についての情報収集はもちろん大切なことですが、それ以上に「集められた情報をどう読み解くのか」ということが課題で、メイアイヘルプユーの事前読込の会議の機会に先輩評価調査者から“資料を読み解く視点”を覚えてもらえたことがとても勉強になりました。事前読み込みの時間を、私はずっと大切にしています。

評価チーム内では、具体的なサービス内容の評価項目の講評を担当することが多く、訪問調査時のヒアリングで受審事業所の取り組みに触れることは大変興味深く、自分の職場にもいろいろ活かせることがあり、とても勉強になっています。

なお、管理職となってからは、これまで以上に「組織マネジメント」の項目からも刺激を受けるようになりました。ケア現場

をバフフルに支えるマネジメントの素晴らしさに出会ったり、わが身に置き換えて襟を正したくなる運営体制に触れることで、管理者としての新たな学びの機会を得ていると感じています。



これまでの評



価調査者としての短い時間を思い起こせば、私の評価調査者としての背骨は、間違いなくメイアイヘルプユーの諸先輩からの学びによって形づくられたと実感しています。

丁寧な研修や事前の打ち合わせ、ヒアリング後の合議など、どれ一つとっても手抜きのない、一つひとつが自分の学びになる得がたい環境です。

今後の活動では、高齢福祉分野はもちろん、新たな分野でも受審事業所の成長を応援し、その成長をともに喜び合える評価調査者を目指して励んでいきたいと心に期しています。

■シンポジスト・3 / 村上 信

私は、シンポジウムのなかで第三者評価調査者としてのこれまでのキャリアと現在の活動について報告しました。リハビリテーションセンターでのソーシャルワーク実践、病院運営管理、そして教員としての人材育成を経て評価調査者となり、現在も評価活動を継続しています。



評価に臨む際は、その事業所の前回の評価受審時の講評や資料などから重点ポイントを明確化し、改善点や継続的な取り組みなどをなるべく丁寧に確認しています。

また、変化する現代の社会に対応するため、学び直しの機会を積極的に取り入れ、AIなどの情報技術の応用にも関心をもつようにしています。AIの活用には、資料分析の効率化や新たな視点の発見につながる可能性を感じています。

第三者評価の現場では、事業所の地域福祉に貢献する実践から多くの学びを得ています。メイアイヘルプユーが独自に作成した『評価者必携マニュアル』や開催してくれる内部研修会などでも実践知が豊富に学べるため、所属評価者に対する手厚い支援体制に感謝しています。

今後、評価機関に対して望むこととしては「OJTの活用強化」を伝えました。事前読み込みや訪問調査時のヒアリング技術の向上のためには、マニュアルの学習だけでなく、OJTを通じた学びが効果的であると考えからです。



今回のシンポジウムは、福祉サービス第三者評価の重要性と、評価調査者に求められる資質について深く考える機会となりました。

司会・新津代表の「評価調査者になるためにはまず経験が必要である」というお話は、私のこれまでの経験が評価活動の基盤となっていることを再認識させてくれました。

一方で、個人の経験知に頼るだけでなく、評価機関の研修や他の評価調査者との交流を通じた学びの重要性も再確認できました。特に、私以外のシンポジウム登壇者の発表が

らは、それぞれの専門性や経験に基づく多様な視点、日々の努力や工夫がうかがえ、大変刺激を受けました。介護分野の経験が豊富な登壇者の「数字に着目した事前読み込みの視点」に刺激されました。

シンポジウム全体を通して「福祉サービスの質の向上に寄与する活動」という私たち評価機関の目指す方向性が明確に示されたと感じています。私自身も今後さらに専門性を高め、受審事業者がサービスをよりよいものにするための支援に貢献できるよう、一層努力していきたいと強く思いました。

会場参加者から 25周年記念会に参加して

古川明良(岩手県・特別養護老人ホームあいでんの里 施設長)
高橋是司(新潟県・社会福祉法人 つばめ福祉会 理事長)
渡辺真紀(東京都・一般社団法人Riccolab. 代表理事)

■アクティブに、自主・自立の心をもって

さまざまな時代の変化や荒波に立ち向かい、重ね重ねて25年、メイアイヘルプユウの会員に加わったことで、新津代表のもと、鳥海事務局長をはじめ全国のさまざまな地域で「地域福祉」を支える仲間にお会いできたことは、歳を重ねて今年度内に75歳、後期高齢者にも仲間入りとなるわが身には、大いなる刺激となりました。

今回の懇親会で感じたことですが、若い参加者が多く、その方々と情報交換が行えたことはこれまでにない経験であり、地方には考えが及ばないさまざまな気づきや刺激を受ける機会となりました。岩手県釜石市から朝4時起きで上京した甲斐があった1日でした。



今年で東日本大震災から14年になります。地方と都市部の格差拡大や超超超少子高齢化が進展するという大きな課題を抱える地域社会では、マスメディアなどがさまざまに流すコマーシャルを含めた情報の過多によって高齢者の不安が煽られ、それが地元経済のあり方にも影響を及ぼし、人々の日常生活の活動意欲をも阻害しているように感じています。

つまり、言い換えれば、高齢者が持つ年金資金が老後や生活への不安で塩漬け化され、貴重な「お金」が地域社会に対して有効に還元されず、経済の循環が阻害され、地域経済を冷え込ませ、高齢者の健康面においては身体のフレイル化と認知症の発症を助長しているのではないかと考えます。

思うにこの時代に生きる「高齢者」は、従来の慣習やしきたりに捉われず「アクティブ」にものごとを考え、自主・自立の心をもって、フレイル化や認知症と疎遠な生き方で生涯を終え



たいものと考えます。



25周年を経て、これからも新津代表を先頭に、メイアイに集う会員の皆様とともに「自ら考え、塊となって行動を起こす」。こう考えるのは、私だけでしょうか。

メイアイヘルプユウの益々の発展と30周年記念会の開催を大いに期待し、5年後、再び皆さんにお会いしたいと思います。(古川明良 Furukawa, Akiyoshi)

■第三者評価を受審した社会福祉法人の学び

設立25周年、おめでとうございます。先日は記念会と懇親会に参加させていただき、ありがとうございました。記念講演では人口減少社会で生命を守る地域共生のあり方を考え、勉強させていただき、非営利組織の重要性が理解できました。また、記念シンポジウムでは福祉現場でさまざまな経験をしてから評価調査者となったシンポジストの皆さんのお話を伺うことができ、そのなかで「経営面の組織マネジメントを理解できるようになってきた」との発言があり、それを聞きながら「うん、うん」と共感している自分がいました。



当法人つばめ福祉会は、今から25年前にメイアイヘルプユウの第三者評価を受ける機会をいただきました。当時の私は、2000年4月の介護保険制度と同時にスタートした特別養護老人ホームの新人施設長でした。介護技術やケアプランがわかっているつもりの若い施設長は「利益が上がれば理念なんかはどうでもよい」と思っていました。そんなとき、新津ふみ子さんと元ゆきくに大和総合病院の齋藤芳雄先生に評価をしていただき、本当に施設長として勉強になりました。

法人の理念というものは、公表すれば利用者、地域、そして職員との約束になります。その約束が守られなければ、施設は継続できなくなってしまいます。公表している理念が守られているのかを、信頼できる評価機関から評価していただければ安心です。シンポジウムの意見交換の場では、受審施設と評価機関メイアイヘルプユウとの信頼関係が確認でき、嬉しくなりました。今回参加していたある評価機関から「訪問調査の準備として、WAM NETで受審施設の財務諸表をチェックする」と聞き「なるほど」と思いました。事業の成果は、決算書にも現われますからね。懇親会でたくさんの参加者の皆さんと話し、情報交換できたことも、大変勉強になりました。

私は、第三者評価事業の評価機関の経営のあり方についても迷っていましたが、今回参加したことでスッキリしました。また参加させてください。

メイアイヘルプユウの益々の発展をお祈りしています。

(高橋是司 Takahashi, Seiji)



■福祉サービス第三者評価を振り返る

新津先生、鳥海先生、そしてメイアイヘルプユウの活動を支える多くの皆さま、法人設立25周年、おめでとうございます。

今回の25周年記念会に参加し、福祉サービス第三者評価を通して私たちが社会に貢献できることはどのようなことなのか、改めて考える機会をもつことができました。ありがとうございます。



現在、東京都には120弱の第三者評価機関があり、年間4,000か所以上の事業所が第三者評価を受審しています。東京都福祉サービス評価推進機構では、評価機関の質の向上と標準化に向けて各種の研修を行っていますが、報告書の内容をはじめ、評価の進め方など、実態について現状では評価機関による違いがあり、それは評価機関の独自性を活かせる一方で、評価の質についての検証が課題になっていると思われま

す。そのようななかで、メイアイヘルプユウでは評価制度の導入当初から、制度や政策を踏まえながら福祉の実状を学ぶ研修を開催し、評価調査者のスキル向上に役立てるとともに、新津先生が評価のあり方について熱く語り、オピニオンリーダーとしての役割を果たされていることが何よりも財産になっていると思います。



思えば、私が新津先生、鳥海先生と出会ったのは、介護保険法が施行される年のさらに10年前にさかのぼります。新津先生は訪問看護の道を拓き、鳥海先生はそれまでの特養の介護内容や利用者への対応など、多くの変革を進めていました。

お二人がいなければ、現在の高齢者介護の世界はどのようになっていたでしょう。理想を実現してきたお二人です。だからこそ、メイアイヘルプユウというブランドが確立されて「第三者評価から学びを得たい」と思う事業所から選ばれているでしょう。



私たちも、第三者評価を価値あるものにするために必要なことは何か、お二人の背中を追いながら考えていきます。

末筆ながら、メイアイヘルプユウの益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。
(渡辺真紀 Watanabe, Maki)

事務局だより

この夏も全国各地で線状降水帯の発生とその被害、熱中症による死亡者・救急搬送者数などが報道されています。例年のない酷暑は毎年繰り返され、気温40度超を記録した都市も複数となり、気象庁は「特別な事情がない限り日中の不要不急の外出は控えるように」と注意喚起しています。ここ東京のコンクリートジャングルでは夜間も気温が下がらず、日中の舗装道路では照り返しも受け、体感温度が45度超になることも珍しくありません。

設立25周年記念会を行ったのは7月5日、すでに東京では酷暑の日々に突入していましたが、渋谷駅近くの会場には、東京近郊だけでなく岩手県、新潟県、京都府、静岡県などの遠方からも足をお運びいただき、57名が集いました。記念講演とシンポジウムを行い、特にシンポジウムではメイアイヘルプユウで評価に携わる3名が自らの体験を報告し、それを新津代表理事の司会で会場とのやり取りに発展させていきました。会場で聞いていた私の感想として、実に身の丈に合った内容で、第三者評価に求められていることがわかりやすく伝わったのではないかと思います。つまり「あるべき論」などではなかったからです。

そのような記念会を終えて、同じフロアの懇親会場にも参加者の大部分が移動してくださいました。立食パーティの懇親会では、初対面でも交流しやすいように所属と氏名を記した名札をつけていただき、会場のあちこちに皆様の楽しい交流の様子が見て取れました。



懇親会の終了時刻になっても、雰囲気はまだ別れ難い気分です。「3次会は会場周辺で」と予定していたのですが、外はまだ暑く、店探しも大変なため、メイアイヘルプユウの事務所まで飲み直しということになり、10数名が事務所にたどり着きました。とにかく、気兼ねなく安心して飲み直せる事務所で、夜も更けていきました。でも、飲みながらも第三者評価について語っている様子は、メイアイヘルプユウならではの光景です。

とにもかくにも25周年を迎えられたことは、会員をはじめとする皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。25周年記念会を終えましたが、二宮尊徳翁の『元日や今年も来るぞ大晦日』の例えのごとく、30周年はあつと言う間に来るはずで

(文責・事務局長／鳥海)

みなさまからの社会福祉情報お待ちしております。(編)

メールアドレス: smile-npo@meiai.org

*HPアドレス: <https://www.meiai.org/>

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2

五反田サンハイツ714

(03)3494-9033

NPO法人メイアイヘルプユウ